

Vol.14
2020年
春・夏号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
※U-CoRoはゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しく都市化も経験しました。時をさかのぼって見ると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代へつぎつぎと。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

上町台地から想いを馳せる、 “共”の知としての災害史と文化

上町台地の周囲に広がる平野は、かつては海でした。淀川・大和川の河口部に生まれた、無数の洲が大阪の原風景。大阪湾を抱き、水際に向かって拓かれていったまちは、災害とともに歩んできたといってもいいでしょう。庶民が基の情報をいち早く共有できる瓦版が行き渡った幕末、そして新聞や雑誌が興隆した近代には、災害をめぐる様々な記録が遺されています。当時、都市づくりの一方の極に博覧会があったとすると、もう一方の極に災害がありました。創造と喪失の両極の間で、言論や文化をリードしていた人々は、“共”の知を見据え、後世に向けてメッセージを発しています。“レガシー”という言葉が躍る今こそ、その声に耳を傾けるべき時だと気づかされます。



表紙は「四天王寺五重塔倒壊の図」(長谷川小信筆の木版画)

1934年 室戸台風

大災害に「上方」が緊急特集号を発行

1934(昭和9)年、室戸台風の被害の惨状を目の当たりにして、郷土研究誌「上方」を編集していた南木芳太郎(※)は、第46号(10月号)の内容を急遽変更し、大阪をはじめ近畿各地の被害を伝える新聞記事や写真を採録して「上方大風水害号」として出版。要所を抑え正確を期し追記の記事が集められた。あとがきに、自らのやむにやまれぬ思いを述べ、「将来への備忘として残るやうな記録を作つて置く必要がある」と考え、これを編んだと記している。

大坂城と地震・災害

1596(文禄5・慶長元年)年の慶長伏見地震で完成直後の伏見城天守が倒壊。外港・堺の被害も大きく、大坂と堺を結ぶ秀吉の長大な城下町構想も変更。豊臣大坂城(1583(天正11)年~)は大坂夏の陣で落城し、徳川期に築かれた大坂城の天守は落雷で焼失。幕末、安政地震から引き続き動乱のなか、1868(慶応4)年に建物の大半を焼亡した。

南木芳太郎「コレクション」と大阪の災害

2011年3月、大阪城天守閣は同テーマ展「大坂の災害」を行った。主な展示資料6点を紹介したが、そのうち江戸時代末の安政の大坂の津波被害を報じる品で、押し寄せた津波が大坂の堀川を遡り、数多くの船を押し上げ、橋や家屋を押し流したことを伝えている。東日本大震災が発生したのは、プレス発表の2日後のこと。まさに瓦版に記された内容を彷彿とさせる惨禍に私は言葉を失った。その瓦版は、戦前に活躍した郷土研究者の南木芳太郎が集めた庶民生活資料「南木コレクション」に含まれるもので、私は大阪城天守閣に勤め始めた当初から同コレクションの整理に携わった。南木自身、1934年の室戸台風の惨状に雑誌「上方」で「上方大風水害号」を緊急編集している。巻頭には、大正橋本屋に立つ「安政元年津浪の碑」の写真が載せられているが、その碑文にも、これを永遠に伝える後人の戒めにと記されている。それがその時代の伝えようを通して、今は私の心にもつなげられている。

2011年3月、大阪城天守閣は同テーマ展「大坂の災害」を行った。

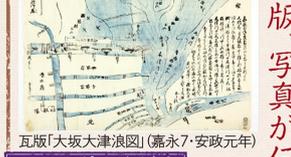
主な展示資料6点を紹介したが、そのうち江戸時代末の安政の大坂の津波被害を報じる品で、押し寄せた津波が大坂の堀川を遡り、数多くの船を押し上げ、橋や家屋を押し流したことを伝えている。東日本大震災が発生したのは、プレス発表の2日後のこと。まさに瓦版に記された内容を彷彿とさせる惨禍に私は言葉を失った。その瓦版は、戦前に活躍した郷土研究者の南木芳太郎が集めた庶民生活資料「南木コレクション」に含まれるもので、私は大阪城天守閣に勤め始めた当初から同コレクションの整理に携わった。南木自身、1934年の室戸台風の惨状に雑誌「上方」で「上方大風水害号」を緊急編集している。巻頭には、大正橋本屋に立つ「安政元年津浪の碑」の写真が載せられているが、その碑文にも、これを永遠に伝える後人の戒めにと記されている。それがその時代の伝えようを通して、今は私の心にもつなげられている。

1934年 室戸台風

木造校舎倒壊で多大な犠牲者

大阪城公園内にそびえる「教育塔」は、学校活動中に不慮の事象で死亡した児童や教職員らの慰霊塔。1934(昭和9)年の室戸台風の襲来で木造校舎の多くが倒壊し、校内で多数の死者を出したことを契機に、悲劇を繰り返さないという思いを込めて、1936(昭和11)年に建てられた。

1854年 安政大地震・津波



瓦版「大坂大津浪図」(嘉永7・安政元年)

1854年 安政大地震・津波

瓦版「大坂大津浪図」(嘉永7・安政元年)

瓦版「大坂大津浪図」(嘉永7・安政元年)

1854年 安政大地震・津波



破壊された築港橋と遭難船(昭和9年)

上町台地災害史

- BC1万年前後 この頃、上町新層が動いた可能性
- 686(朱鳥元) 1月：火災により難波宮が全焼
- 753(天平勝宝5) 9月：高潮で御津村で560人余が溺没
- 817(弘仁8) 7月：摂津国に大津波、死者200人余
- 848(慶祥元) 8月：平安京や畿内に大洪水、茨田堤が崩壊
- 1361(正平16) 6月：近畿に大地震(四天王寺金堂倒壊)
- 7月：難波浦に大津波
- 8月：摂津・河内両国に大地震、死者多数
- 11月：大坂本願寺大火、寺中2,000軒焼失
- 1580(永禄3) 8月：石山合戦の和陸後、本願寺は火災により焼失
- 1596(文禄5・慶長元) 9月：慶長伏見地震(大坂城でも被害)
- 1615(元和元) 5月：大坂夏の陣にて、大坂城炎上
- 1666(寛文6) 12月：雄島焼(現西区)より出火(1,933軒焼失)
- 1703(元禄16) 11月：関東で元禄大地震
- 1707(宝永4) 10月：宝永地震(津波が大坂湾襲来) 11月：富士山噴火
- 1708(宝永5) 12月：道修町大火(65軒焼失)
- 1724(享保9) 3月：大火(妙知焼)(市街の2/3、12,205軒が焼失)
- 1756(宝暦6) 2月：本町で大火 9月：淀川洪水
- 1757(宝暦7) 9月：安堂寺橋付近より出火し、谷町まで焼く
- 1763(宝暦13) 9月：近畿地方に風水害
- 1777(安永6) 12月：堂島・天満で大火
- 1783(天明3) 12月：内野町で出火(1,500軒焼失)
- 1789(寛政元) 12月：南本町より失火(寛政の大火、上町まで57軒焼失)
- 1791(寛政3) 10月：南堀江より失火(87軒を焼失)
- 1792(寛政4) 5月：天満大火(89町、2,118軒が焼失)
- 5月：雲仙山崩れと津波
- 1802(享和2) 7月：淀川大洪水、43カ所で堤防決壊
- 1834(天保5) 7月：堂島新地で大火(約20,000軒が焼失)
- 1837(天保8) 2月：大塚平八郎の乱で北組・天海組焼失(大塚焼)
- 1846(弘化3) 11月：天満大火(48町と曾根崎・北野・川崎村焼失)
- 1852(嘉永5) 12月：上町で大火(東横堀川から谷町まで焼失)
- 1854(嘉永7・文禄元) 11月：安政大地震(東海・南海同時発生)による津波襲来
- 1855(安政2) 10月：安政江戸地震
- 1856(安政3) 5月：道頓堀で大火(58軒焼失)
- 1863(文久3) 11月：大火(新町焼)(市街2割焼失、玉造稲荷神社も焼失)
- 1868(嘉永4・明治元) 1月：大坂城焼失
- 1868(明治元) 5月：淀川大洪水
- 1868(明治元) 1月：大火(曲焼)(火は松屋町に及ぶ)
- 1885(明治18) 6・7月：淀川大洪水、被害甚大で市内の橋梁が多数流失
- 1890(明治23) 9月：新町で大火(明治の新町焼)
- 1891(明治24) 10月：濃尾地震
- 1896(明治29) 6月：明治三陸地震・大津波
- 1904(明治37) 6月：淀川改修工事完了
- 1909(明治42) 7月：「大の大火」(新地から天満にかけ、11,300戸余焼失)
- 1912(明治45) 1月：「南の大火」(難波新地一帯4,576戸焼失、生國魂神社も焼失)
- 1917(大正2) 10月：淀川大洪水(高橋から河口付近まで浸水)
- 1923(大正12) 9月：関東大震災(関西にも多数の避難者)
- 1925(大正14) 5月：北但馬大地震
- 1931(昭和6) 6月：港区で大火(416戸焼失)
- 1933(昭和8) 5月：昭和三陸地震・大津波
- 1934(昭和9) 9月：室戸台風襲来(四天王寺塔や木造校舎など倒壊)
- 1944(昭和19) 12月：東南海地震(昭和三陸地震)
- 1945(昭和20) 3月：第一次大坂空襲
- 1946(昭和21) 12月：昭和三陸地震
- 1948(昭和23) 6月：熊井地震
- 1950(昭和25) 9月：ジェーン台風襲来(生國魂神社本殿倒壊)
- 1952(昭和27) 7月：大阪市内で豪雨災害(市に災害救助法を適用)
- 1959(昭和34) 9月：伊勢湾台風で各地に記録的被害
- 1961(昭和36) 9月：第2室戸台風襲来
- 1974(昭和49) 4月：大坂に記録的豪雨
- 1976(昭和51) 10月：酒田大火
- 1983(昭和58) 5月：日本海中部地震・津波
- 1991(平成3) 6月：雲仙普賢岳噴火
- 1995(平成7) 1月：阪神・淡路大震災
- 2004(平成16) 10月：豊岡水害、新潟県中越地震
- 2007(平成19) 3月：能登半島西方沖地震 7月：新潟県中越沖地震
- 2011(平成23) 3月：東日本大震災
- 2016(平成28) 4月：熊本地震
- 2018(平成30) 6月：大坂府北部地震 7月：西日本豪雨 9月：台風第21号で広域被害、北海道胆振東部地震
- 2019(令和元) 10月：台風第19号で東日本に記録的被害

※1 なんき・よしたろう(1882~1945)
大阪を代表する郷土研究者。大阪生まれ。秘蔵の書籍コレクション「南木文庫」は戦災で焼失。大阪の庶民の生活資料を集めた「南木コレクション」が大坂城天守閣に残る。上方郷土研究会を創設して、1931年に機関誌「上方」を創刊し、1944年の151号まで刊行した。

※2 南木コレクションシリーズ第11回「瓦版にみる幕末大坂の事件史・災害史」2011年3月19日~5月8日 大阪城天守閣

1854年 安政大地震・津波

津波への備えの必要性を伝える

1854(嘉永7・安政元年)年11月4・5日両日の大地震と津波により、幕末の大坂でも多数の人命が奪われた。後世に地震と津波の恐ろしさを伝えるために、町人たちによって、翌年秋に建てられた慰霊碑が今も四天王寺に残されている。

1934年 室戸台風

「大阪市風水害誌」を編集

室戸台風襲来の翌年、大阪市は1226頁に及ぶ大部の災害記録を編集した。最低気圧911.9ヘクトパスカルで市内瞬間最大風速60m以上の巨大台風により、市内面積の約27%が浸水し、港湾機能は麻痺、小学校の70%以上が大破するという凄惨な状況。台風によって都市機能の多くを失った「被害の実情」と「救護の顛末」を録し、「[復旧復興計画の]大要」を記すための災害記録として編まれた一書。

1854年 安政大地震・津波

津波の犠牲者を供養して建碑

生野区の舍利尊勝寺の門前に立つ石碑は、安政大地震の津波で亡くなった人々を向向するもの。元代常念経回向「為地震津波犠死建之」と記されている。



上町台地の寺社は、巨大台風の強風にとさらされ、大きな被害を受けた。象徴的な出来事は四天王寺の五重塔の崩壊。雑誌「上方」第46号に掲載された大阪毎日新聞の記事は、倒壊の瞬間をこう記している。「午前八時前、東大阪一帯が突風に襲はれ突如五重塔の上半が異様な音を立てながらメリメリと動きだし(中略)アッといふ間に五重塔の南側の仁王門がガタガタとばかりに(北東)方向に倒れ約二分間の後五重塔も北東へ崩れ出た。強い風雨を避けて塔の軒下へ逃げた人たちが犠牲になった」と。

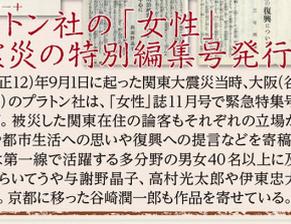
※第1面掲載の瓦版、はがき、写真などは、大阪市立図書館デジタルアーカイブより。雑誌、書籍は個人蔵ほか。

建築誌が調査と特集号を発行

大坂で設立された日本建築協会は災害と都市の問題をテーマに、現地調査や講演会などを実施し、雑誌「建築と社会」でも特集した。1931(昭和6)年には「震災と建築」号(片岡安「耐震防火建築」、武田五一「地震國日本の建築」ほか)を発行。

「女性」大震災の特別編集号発行

1923(大正12)年9月1日に起きた関東大震災当時、大阪(谷町五丁目)のプラトン社は、「女性」誌11月号で緊急特集号を編んだ。被災した関東在住の論客もそれぞれの立場から社会や都市生活への思いや復興への提言などを寄稿。執筆者は第一線へ活躍する多分野の男女40名以上に及び、平塚らいてうや与謝野晶子、高村光太郎や伊東忠太らの名も。京都に移った谷崎潤一郎も作品を寄せている。



※青文字は被害が「上町台地」に及んだ災害、赤文字は全国的に大きな影響があった災害。

減災文化を耕す 地域に根差した“共”の場づくり

上町台地から想いを馳せる、 “共”の知としての災害史と文化

阪神・淡路大震災から、25年が経ちました。また、2018年の大阪北部地震の大きな揺れや台風21号の猛威は、災害と不可分の大阪のまちの記憶を蘇らせるものでした。改めて過去の災害の記録に目を向けると、苦境を乗り越えていく人々の相互支援の柔軟さや力強さに目を瞠るものがあります。そして、今、重ねられてきた先人たちの経験と志を受け継ぐかのように、地域に根差したレジリエンス(回復力など)の種となる“共”の場づくりが試みられています。

北大江公園 住民による 地域づくりの舞台

住民参加による公園再生の取組みから始まった北大江地区のまちづくり活動。住民だけでなく近隣の企業に勤める人も関わった公園の清掃や花壇づくりなど、日々の活動を地道に展開している。公園での恒例イベントでは、冬の「あつたか まち祭り」は今年16回目、当初、公園が一時避難所ということと防災設備を知ってもらおうと始めたものが次第に内容も充実。「北大江たそがれコンサート」も秋の催しとして定着している。



イベントの舞台は都心の公園



「北大江あつたかまち祭り」では、バームクーヘン、まきまきパンづくり、クラフト体験、子ども防災ラリーなどの体験企画が満載。

公園を核に関係づくりの試み
吉見孝信 さん(北大江地区まちづくり実行委員会委員長)
広場づくりや地域防災と言っても、結局、人と人の関係づくりが大切。都心部で古からの住民は少なく高齢化しているなかで、近隣の企業や学校に通学・通学している方や、若い世代の住民とのつながりが大事で、その核になるのがまごころの公園。最近では、保育所やフリースクール、学童の担い手の若い人も活動に参加している。これまで積み重ねてきたことで防災についても基盤が生まれてきたと感じている。

都心にコミュニケーションを
三木啓正 さん(都市空間企画研究所代表)
住人や勤め人、単身者にファミリー、いろんな人たちが行き交うこの地域のまちづくりでは、都心におけるコミュニケーションのあり方は何かが常に課題で、試行錯誤の連続。地域につながる人々が自然に集まる機会をどうつくり出すかを工夫してきたが、そこの対話から、実際にいろいろなアイデアが生まれてきた。活動を続けていくには波があるが、新しい人が加わることで、乗り越えられたと実感している。

伝説の井戸を 地域とともに復活!

高津宮付近は、かつては名水の地として知られたところ。江戸期の「摂津名所図会」に描かれた「名水の井戸」復活のプロジェクトが、氏子や大阪の会社経営者有志の協力で、現在、2020年4月完成を目標に進行中。掘削方法は伝統の「上総(かず)掘り」を参考に工夫したもので、土圧などには大勢の老若男女が綱を引く声が境内に響いている。



「摂津名所図会」には本殿近くの井戸が描かれている。

昔境内にあったという「梅の井」の跡が参道に残る。

子どもたちや参拝の方も手伝いに加わって、新しい緑も生まれている。

井戸掘りから生まれる縁に感謝
小谷真功 さん(高津宮宮司)
高津宮は昔から良水が出ると言われている場所。名物と言われた「高津湯豆腐」も良い水でできる美味しい豆腐があったからという。氏子や高津宮ファンの方々の申し出で始まった井戸掘りには、すでに何百人もの人が加わり、一緒に綱を引いてくださった。そこに新しい縁が生まれている。井戸が整備されたら、神事に使うとともに、いざという時の地域の防災井戸として活用していきたい。

まちの風景を豊かにしていきたい
岸村修 さん(ももに広場管理運営会会長)
毎月開かれる「青空カフェ」などで新しいアイデアが生まれ、自発的な取組みにつながっている。あまり成果を求めず、どちらかと言えば、風景をつかっていきたい。例えば鈴虫の音を聞かせる人が集まり、俳句や川柳を詠む。そんな時、お年寄りや子どもたちの創造力についても驚かされる。年末には、亡くなった方に追悼のうそを詠む。悲しみも分かちあうことが、「共助」につながると思っている。

**ゲストハウスとカフェと庭
ココルーム**
西成区太子2-3-3 ⑤
**おっちゃんたちを先生に
井戸掘りの真価を探求**
大阪・釜ヶ崎で「であいと表現の場」づくりを続けている「ココルーム」が、井戸を掘り始めたのは2019年の春。パジャール会で活動していた蓮岡修さんの、途上国で求められる井戸は、壊れても自分たちで直し、維持できるものだという話に触発され、釜ヶ崎で井戸を掘るとしたら、土で生きてきたおっちゃんたちの知恵を生かすことと、彼らを先生に、自分たちの力で井戸掘りが始まった。



西成のおっちゃんたちもゲストハウスの旅人たちも、子どもたちも一緒に、人力での穴掘りや井戸枠づくりの作業が続けられた。

ももに広場

ももに広場は、民間企業から地域のためにとの、創業地提供の申し出を受けて大阪市が国の交付金を活用して整備。2013年2月に完成した。毎月の「青空カフェ」、春の「ももに広場誕生祭」、秋の「敬老祭」、年末には地域の故人を偲ぶ「どんど祭」などを継続的に開催。地域コミュニティを育むための、なくてはならない人々の交流の場になっている。

**防災力向上にも役立つ
地域広場の多様な活用**
ももに広場は、民間企業から地域のためにとの、創業地提供の申し出を受けて大阪市が国の交付金を活用して整備。2013年2月に完成した。毎月の「青空カフェ」、春の「ももに広場誕生祭」、秋の「敬老祭」、年末には地域の故人を偲ぶ「どんど祭」などを継続的に開催。地域コミュニティを育むための、なくてはならない人々の交流の場になっている。

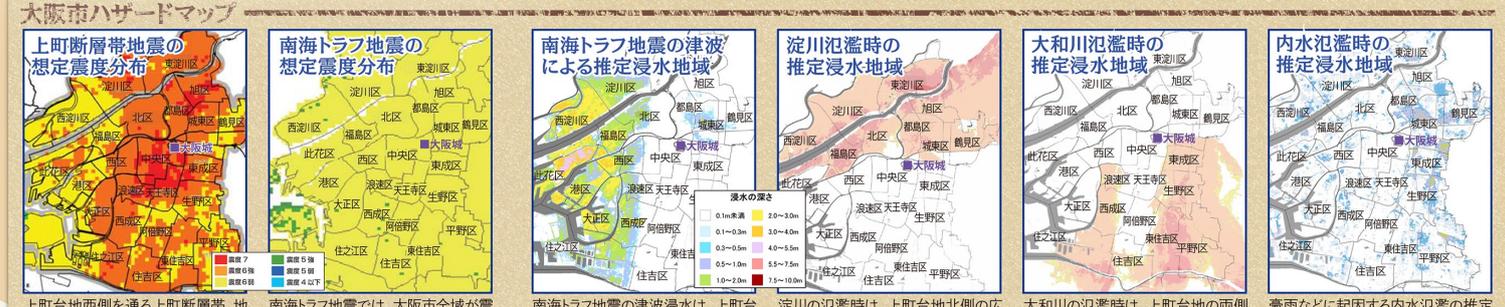
釜ヶ崎の知恵と技で生き返る!
上田假奈代 さん(詩人・ココルーム代表)
いのちをつなぐ水を得るために、自分たちの手で大阪の真ん中に井戸を掘ろうと決意。掘り始めると釜ヶ崎のおっちゃんたちは本領発揮で、みんなは尊敬の眼差し。彼らは作業が早いだけでなく顔面も引き、安全確認も的確。大変だけれど、大勢の人や子どもたちも加わり、汗かいて、楽しかった!日本の土木・建設を支えた最高の技。おっちゃんたちに学んで、災害時にも生きる知恵をまとめて本にしたい!

農と食の体験から多文化共生へ
アンディカ ディアパリ Andika Diapari さん(KIKUNOサラダボウル・プロジェクト代表)
インドネシアから来日して生野区に住み、2年後の2016年、大学院生の頃に松野農園に出会えた。私自身、農業体験を通して、地域の人と外国から来ている人たちの親密な関係性を築きたいと考えており、吉岡さんに相談し立ち上げたのが「KIKUNOサラダボウル・プロジェクト」。私は、しばらくインドネシアにいますが、母国でもこのプロジェクトを継続し、日本との架け橋となる活動を続けていきたい。

松野農園 食と農を基盤にした 交流と多文化共生

松野農園は、食と農を基盤とした交流拠点。NPO法人「出発(たびだち)のなまの会」が築70年以上の助産院を改修し裏庭に農地も備えた。同所では、寄席や音楽会などのイベントや、畑で収穫した野菜を調理して食べる「ランチ会」を定期的実施。多文化共生社会を目指す取組みの展開や「生野区の空地・空家を利用した食と農のプロジェクトをすすめる会」なども定例開催している。

ゆるやかなつながりの場づくり
吉岡 徹 さん(出発のなまの会理事)
ここは、土に触れることができ、野菜が育つ喜びを感じることが出来る場所。様々な立場の人が、生野区内外から集まって情報交換するような場づくりを目指している。ゆるやかにつながって、互いに必要ときには助け合えるような居場所であらいたい。毎週火曜日のランチ会が続いているのも、料理づくりなどで支えてくれる人のおかげ。継続していくことがなによりと考えて、根気強く活動している。



ハザードマップ出典：大阪市ホームページ <https://www.city.osaka.lg.jp/kikikanrishitsu/page/00003300629.html> <https://www.city.osaka.lg.jp/kikikanrishitsu/cmsfiles/contents/0000011/11873/m05.pdf>